

平成 27 年度「インクルーシブ教育システム構築モデル事業(学校における交流及び共同学習を通じた障害者理解(心のバリアフリー)の推進)」
成果報告書

団体名	秩父市教育委員会
-----	----------

I 概要

1 事業の概要

【教育委員会のモデル地域への支援について】

秩父市においては、市内 18 の小・中学校に 27 学級が設置されておりこれらの学級と通常の学級との交流及び共同学習を含めインクルーシブ教育システムの構築が課題となっている。このため、特別支援学級設置校の交流及び共同学習について、教育委員会の担当課長及び担当者が、各学期 2 回以上、各学校を訪問し取組状況の把握とともに、交流及び共同学習について指導・助言を行った。

今回「心のバリアフリー」を推進するに当たり、障害者スポーツを通じた交流及び共同学習を実施することとし、各学校に対し、児童生徒への事前学習会の実施とともに学習に対するねらいをしっかりとらせるよう指導した。モデル地域以外の学校においては、講演会や体験学習会への参加を呼びかけ全ての学校が参加し障害者スポーツへの理解を図った。

【モデル地域における障害者スポーツを通じた交流及び共同学習の実施】

○パラリンピック種目「ボッチャ」を通じた交流及び共同学習

モデル地域の小学校 2 校で「ボッチャ」の競技について理解を推進し、体験学習を実施した。当日は、国立特別支援教育総合研究所の研究員 2 名と大阪体育大学の教員を講師に招き、2 回の体験学習を実施した。荒川東小学校では埼玉県立秩父特別支援学校の児童 2 名と市内肢体不自由学級の児童が支援籍学習として参加し交流及び共同学習の実施をした。

○障害者アスリートを交えた交流及び共同学習の実施

障害者アスリートを招き、講義をいただくと同時に障害者スポーツ「アンプティサッカー」の体験及び交流学習会を実施した。障害者や障害者スポーツの理解とともに、キャリア教育の視点から生き方教室としての展開につながった。

○「パラリンピックを 10 倍楽しむ方法」と題した講演会の実施

パラリンピックについての理解を深めるために、講演会を実施し、障害者理解（心のバリアフリー）を深められた。

2 事業の成果

【成果】

ア モデル地域内における取組から

インクルーシブ教育システムの構築に当たり、その前提として障害理解、障害者理解が極めて大切と考え、パラリンピック種目などを通じた交流及び共同学習による障害者理解（心のバリアフリー）に取り組んできた。

障害者アスリートとの交流、「パラリンピックを10倍楽しむ方法」と題した講演会では、生徒が素直に障害者と向き合うことができ、キャリア教育の一環とした生き方教室にもつながり、自然な交流が実施できた。特に、「パラリンピックの父」と言われるドイツのグッドマン博士の「失われたものを数えるな、残っているものを最大限に生かせ」の言葉から、障害者アスリートが自分自身を見つめ、障害の有無にかかわらず全力で競技する姿に、生徒が心から感動し、心のバリアフリーについて真摯に向き合う時間をもつことができた。

今回の講演会及び体験学習会を実施したことにより、生徒及び保護者・地域住民にとって、パラリンピックへの興味関心が高まり、来る東京パラリンピック大会への協力等について前向きに考える意見や感想が寄せられた。また、パラリンピックではどのような種目があるのか、日本ではどのような競技が盛んであるか等についても関心が高まった。

パラリンピック種目である「ボッチャ」の競技を通じ、障害のある子、ない子が一緒に楽しみ、相互理解や思いやりの心を育むきっかけとなった。同時に特別支援学級と通常の学級・特別支援学校との交流及び共同学習を実施する上で、体験学習の機会等の設定によって、特別支援学級の児童や支援籍の児童は、大きな達成感や自信、自己肯定感をえることができ、生活全般において前向きな姿勢が見られた。

「ボッチャ」を楽しむことにより、校内での大会や地域のお年寄りとの交流にも期待をもつことができた。特に、荒川地域では「ペタンク」（ボッチャと類似したボールゲーム）競技が盛んなため、今後はその可能性が広がり新たな交流活動がはじめられそうである。

イ 交流及び共同学習の進展、児童生徒の変容

それぞれの学校での交流及び共同学習を進める中で、これまでのふれあう交流や一緒に参加する交流といった面からだけでなく、合理的配慮の視点を踏まえた交流及び共同学習に取り組むことにより、双方の学校の児童の変容を細かく確認することができるようになった。特に、「ボッチャ」を学ぶ中で、児童にとっては大きな成果が上げられる。

「ランプス」と呼ばれる補助具を使用することにより、口にくわえた割り箸で競技に参加できることが児童にとっては驚きであった。配慮とは手を差し出すことと理解している児童にとっては、大きな転換点となっていた。合理的配慮をすることにより、障害者が自分でできることが増え、参加につながるという気づきのきっかけとなった。

事業を通して、交流及び共同学習の意義や、共に活動し、共に学ぶことの重要性を再認識することができ、短い期間ではあったが、大きな成果をえられることができた。

また、研究協議を積み重ねる中で、教職員の専門性の向上や障害のある児童生徒への理解啓発を図ることもでき、今後の推進に大きな力となるものと思われる。

本事業の成果は、今後の秩父市における交流及び共同学習のモデルになっただけでなく、特別支援教育に関する計画等を検討する上でも大変貴重な機会となった。

3 事業の課題とその解決のために必要な取組

ア 障害者スポーツの啓発活動について

本事業では、パラリンピック種目である「ボッチャ」を通して、障害者スポーツの推進を図ってきた。結果、モデル地域内での理解は進められてきたが、市内全体への啓発は十分ではない。各校の推進担当者の体験研修は2回実施することができたが、各校での体験研修は、全ての学校で実施されていない状況である。今後も引き続き、各学校への体験研修の呼びかけと、児童生徒への普及を計画的に呼びかけていきたい。

小学校では、この「ボッチャ」が、障害者スポーツの一環としてのみの取組でなく、お年寄りとの交流会や保護者とのスポーツ大会など幅広い取組が考えられる。特に、モデル地域となった荒川地域では、「ペタンク」の競技が盛んでもあり、様々なプログラムが予想できる。各方面との調整を図るとともに、プログラムの開発にも力を注いでいきたい。

また、障害者アスリートを招いての障害者スポーツの紹介や体験学習、そして講演を通しての生き方を学ぶ学習を実施してきた。生徒の感想文を見ると多感な時期の生徒にとっては、講師の考え方や職業としてのあり方など考える要素が多分にあり自分の生きる上での道標とした生徒もいたことが読みとれた。本市では、「ふれあい講演会」として、地域で活躍している先輩等を招いて講演会を実施しているが、今まで、障害者アスリートとの交流等は実施されていなかった。今後は、「障害」「合理的配慮」等新たなキーワードを加え、生徒にとって将来を見据えた生き方を感じることができる講演会の実施や生徒の育成を図りたいと考える。

パラリンピックについての啓発は、まさに今始まったばかりである。特別活動や総合的な学習の時間等に各校で計画的な配置をすることや、校長講話で児童生徒への呼びかけを依頼したところである。来るべき東京パラリンピック大会に向け理解を深めて参りたい。

イ 全ての教職員の特別支援教育に関する理解と専門性の向上

特別支援教育コーディネーターの計画的養成をはじめ、管理職研修や教員研修に取り組んできたが、全ての教職員が特別支援教育に関する基礎的な知識・技能を身につけるかどうかは疑問が残る。インクルーシブ教育の構築を進める上では、児童生徒一人一人の状態に応じた教育的配慮を行えるよう、障害の特性等を正しく認識し、インクルーシブ教育の推進に取り組むための研修を今後も計画的に実施することが不可欠であると考えられる。また、全ての管理職がインクルーシブ教育システムの構築に向けたリーダーシップを発揮できるよう理解促進のための研修会を実施していく必要がある。

今後も課題を解決するため、本年度の事業への継続的な取組を継続していきたい。